# 東アジア先史時代の編物に関する雑考:　もじり編みと多経多緯式


| メタデータ | 言語: jpn |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2017-10-03 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 松永, 篤知 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/45101 |

# 東アジア先史時代の編物に関する雑考
# ―もじり編みと多経多緯式―

松永　篤知
（日本考古学協会会員）

## 1. はじめに

近年、縄文時代を中心として、出土編物の研究が様々な形で展開している。実物資料・圧痕資料ともに幾人もの研究者によって分析・検討され、それぞれの視点から多くの情報が引き出されている。

そのような中で筆者は、東アジア的視点・総合的視点から編物資料を捉えることを基本姿勢として研究を進めてきた。その成果として、日本列島や中国大陸における先史編物のあり方が、かなり具体的に見えてくるようになった。東アジア先史時代において編物は、各地域における種々の文化現象（編織技術の革新、土器製作技術の発展、漆工技術の卓越、食物の変化など）を背景としながら、発展的に展開・継承されてきたようである［松永 2013a・2015］。

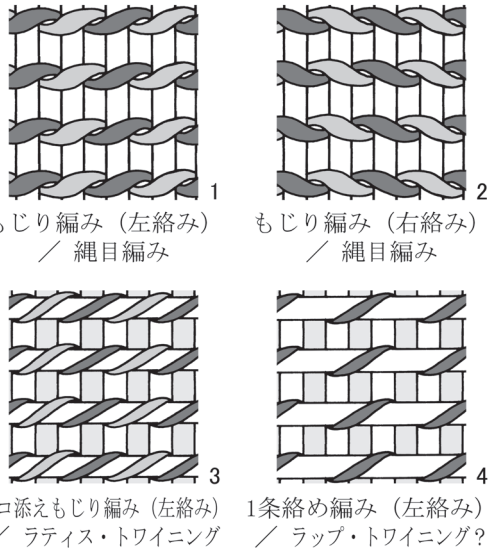
本論では、東アジア先史時代の編物に関して、筆者が長年注目しながらも論文にまとめることができないままになっていた二つのテーマ（もじり編み・多経多緯式）を取り上げる。東アジア先史時代の編物の研究は確実に前進しているが、不明なことは未だ多く、本論を通じてそれらを少しでも解消したい。他研究者の所見・成果も踏まえつつ、先史編物研究について新たな知見を提示する。

## 2. もじり編みの編物について

まずは、広義の「もじり編み」の編物を取り上げることにしたい。東アジア先史時代における、面を形成する編み方を技術系統論的視座から大別すると、「網代編み」・「もじり編み」・「巻き上げ編み」の三系統（それぞれ概ね、吉本忍氏［吉本 1987］の「交叉組織」・「捩り組織」・「巻き組織」、J.M. アドヴァシオ氏［Adovasio et al.1996］の‘plaiting’・‘twining’・‘coiling’に相当[1)]）となるが、その中でもじり編みは、網代編みと並ぶ代表的な編み方である。特に、縄文時代の日本列島において顕著な卓越が見られ、中国大陸や朝鮮半島では資料が少ない。

### 1）もじり編みの定義

そもそも、もじり編みとは、「一方の条材に別の条材を絡め編んだもの」のことである。広義的には、「（典型的な）もじり編み」（一方の条材に別の条材を複数本1単位で絡めるもの:図1-1・2）、「ヨコ添えじり編み」（経条・緯条を交差させ、それに別の条材を複数単位で絡め巻くもの：図1-3）、「1条絡め編み」（経条・緯条を交差させ、それに別の条材を1本単位で絡め巻くもの：図1-4）、「巻きつけ」（経条・緯条を交差させ、それに別の条材を巻きつけるもの）を包括し、それぞれ絡め材の絡め方（巻きつけ方）に左右の別（左：図1-1・3・4、右：図1-2）がある［松永 2013a・2015］[2)]。なお筆者は、典型的なもじり編み以外の編み方（尾関清子氏の「絡み巻き」［尾関 2007］）を一つにまとめることも可能と考え、その名称として「絡め編み（絡




※各模式図の下には、その編み方の「考古学表現 ／ 民具表現その他」を示した。また各模式図は、主にカゴ類を想定して作成したが、器種によっては 90° 回転させて経条・緯条を逆転させた方が図として適切な場合もある。

**図1 広義のもじり編みの各種［松永 2013a を改変］**

め巻き編み)」の語を用いてきた。この類について、高宮紀子氏・本間一恵氏・佐々木由香氏らは、緯条を添えるという共通点に主眼をおき、「ヨコ添え○本巻きつけ編み」と表現することを提案している［佐々木ほか 2014］。これは、ヨコ添えもじり編みの命名者である本間氏も交えた提案であり、十分に傾聴すべきものである。しかし、シンポジウム席上での暫定案ということなので、ひとまず本論では使用しない。筆者の絡め編み（絡め巻き編み）には、「英語のラティス・トワイニング（lattice twining）やラップ・トワイニング（wrap twining）［センテンス 2002］の類または近似技法であり、技術系統論的にはもじり編み（トワイニング：twining、絡める技法・絡め編む技法）の系統に位置づけられる」[3] という意味も込めてあったのだが、「巻きつけ」を前面に出すとその点が伝わらないようにも思われる。もちろん、筆者の編み方分類にも改善すべき点はあるかも知れないが、少なくともこれまで一貫した基準で研究を進めており、そのこと自体に意義があると考えている。そのため、余程の必要に迫られない限りは、上述の通りもじり編み資料を捉えることにしたい。

### 2）もじり編みの諸例（図 2 ～ 4）

それでは、東アジア先史時代におけるもじり編みの具体例を見ることにしよう。

管見の限り、東アジア最古のもじり編み資料は、縄文時代草創期のものである。鹿児島県三角山Ⅰ遺跡［藤﨑・中村 2006］で、隆帯文土器の底部に絡め編み圧痕が残されている（図 2-1）。これは、敷物圧痕の一種であり、当時土器製作用敷物として広義のもじり編みの編物が使用されていたことを示している。

続く縄文時代早期においても、九州地方南部で縄文土器底部に絡め編み圧痕が残される例が知られる（図 2-3［倉永 2001］など）。これは、該地・該期の特徴と言えるほどの分布を見せ［尾関 2012］、草創期以来、ヨコ添えもじり編み・1 条絡め編みの類が九州地方南部の土器製作用敷物として日常的に使用されていた可能性を示唆している。しかし縄文時代前期以降になると、土器底部の絡め編み圧痕は、九州地方においてもほとんど見られなくなる。

縄文時代早期には、もじり編みの実物資料も見つかっている。佐賀県東名遺跡［西田・佐々木ほか 2009］で、カゴ類などにもじり編み（図 2-2 のように部分的な使用が主体）が見られ、平面的な編物のみならず立体的な編物にもこの種の編み方が用いられていたことが分かる。

さらに、縄文時代早期に併行する新石器時代前期後半、中国大陸では河北省磁山遺跡［渡辺 1995］・河南省賈湖遺跡［河南省文物考古研究所 1999］で土器底部に編布圧痕（図 2-4:編布＝もじり編みの布の圧痕［邯鄲市文物保管所・邯鄲地区磁山考古隊短訓班 1977］）が認められる。磁山遺跡では、スダレ状圧痕（スダレ状のもじり編み圧痕）も確認でき、もじり編みによって様々な平面的編物（土器製作用敷物）が製作・使用されていたことが分かる。さらに磁山遺跡の編布圧痕には、すでに織布への移行を占めすもの（疑似平織）が存在し、中国大陸のもじり編みも実際はもっと古くから存在していたことをうかがわせる。

縄文時代前期に入ると、日本列島でも（もじり編みの布である）編布が確認できるようになる。こちらは実物資料・圧痕資料ともに認められ、前者には青森県三内丸山遺跡（図 2-5［岡田ほか 1998］）や山形県押出遺跡（図 2-6［布目 1990］）などの例があり、後者には長野県市道遺跡（図 2-9［中村 2001］）の例がある。また北陸地方では、針葉樹を素材として密なもじり編みのカゴが製作・使用されており（図 2-7［山本 1986］、図 2-8［松永 2014］）、該地における一種の地域性を示している。

縄文時代前期に併行する中国大陸に目を向けると、新石器時代中期仰韶文化の陝西省半坡遺跡［中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館 1963］に編布圧痕が確認できる。しかし、管見に触れたものはこれのみで、以後中国大陸では編布をはじめとするもじり編みは衰退してしまうようである。

朝鮮半島では、新石器時代前期に属する飛鳳里遺跡［任ほか 2008］で、もじり編みの編袋の実物が出土している。朝鮮半島の先史編物資料がきわめて少ない中、もじり編みの存在を示す貴重な証拠である。

縄文時代中期には、実物資料（図 2-11［石橋ほか 2005］、図 2-12［皆川・西脇ほか 1995］、図 2-13［新井 1987］、図 2-14［中井 2007］・図 2-15［安楽・藤田 1985］）・圧痕資料（図 2-16［新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1974］）ともにかなり資料が増え、もじり編みがカゴ・土器製作用敷物など様々な

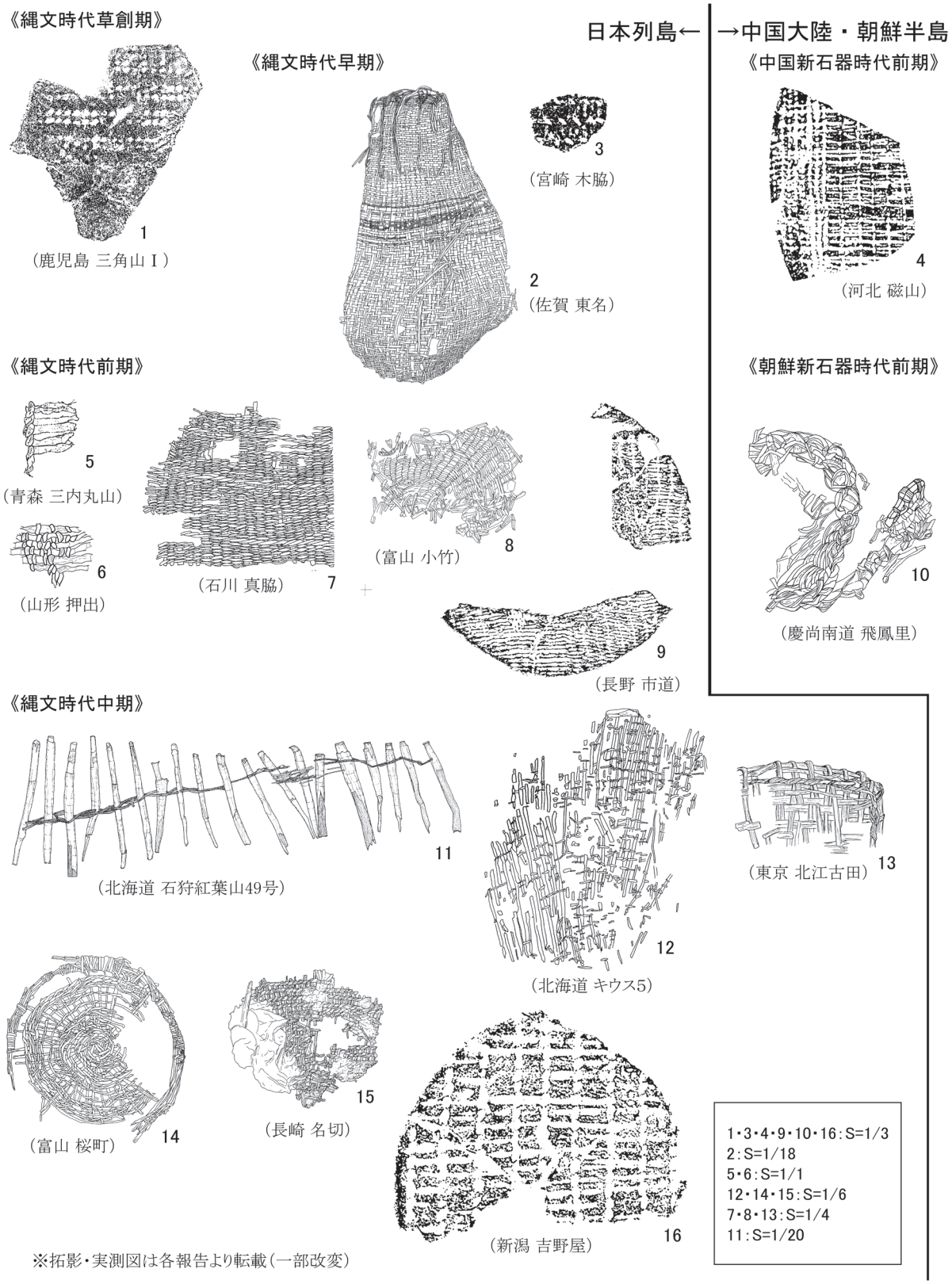



図 2 東アジア先史時代の主なもじり編み資料 1

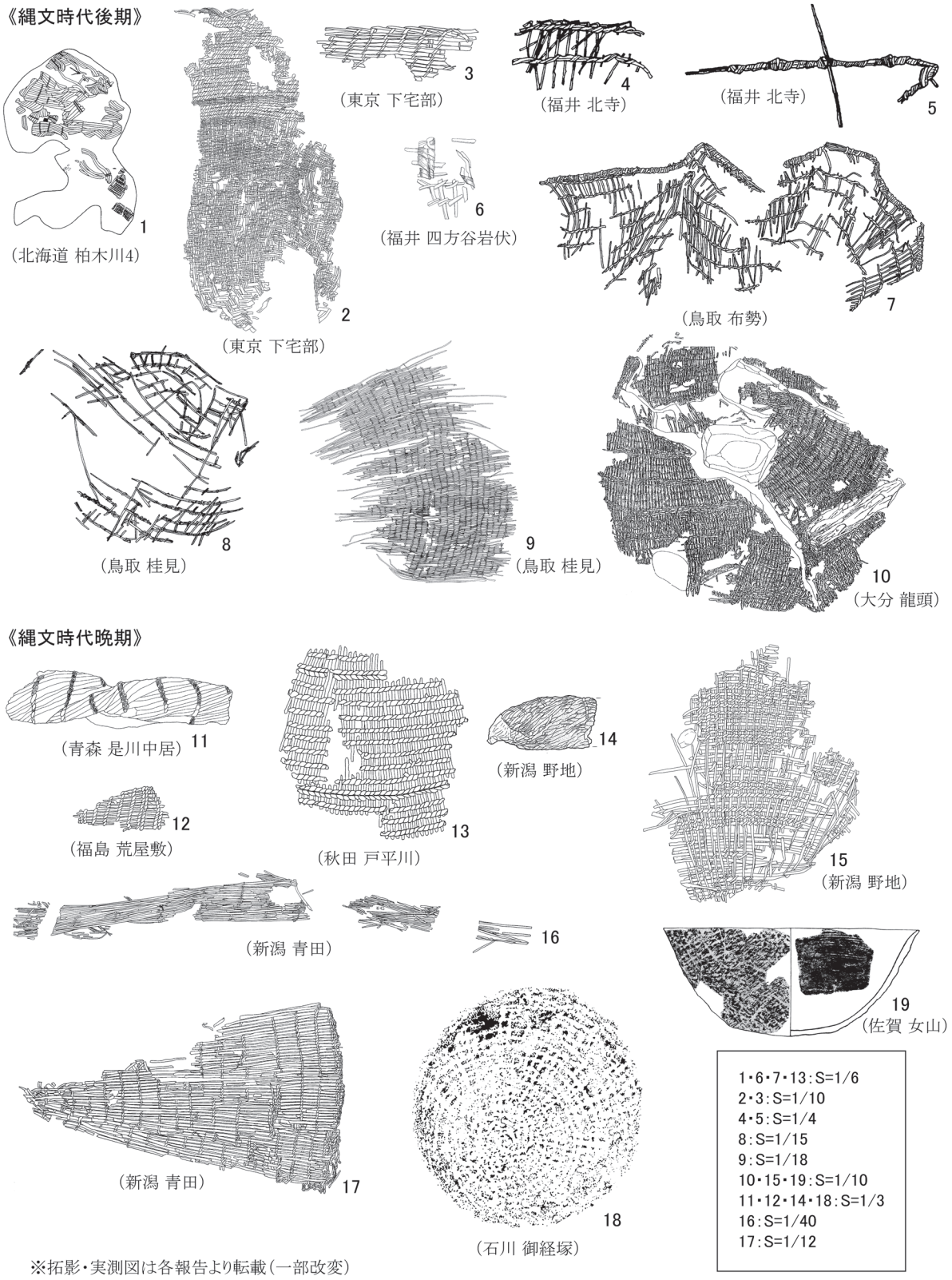



**図 3 東アジア先史時代の主なもじり編み資料 2**

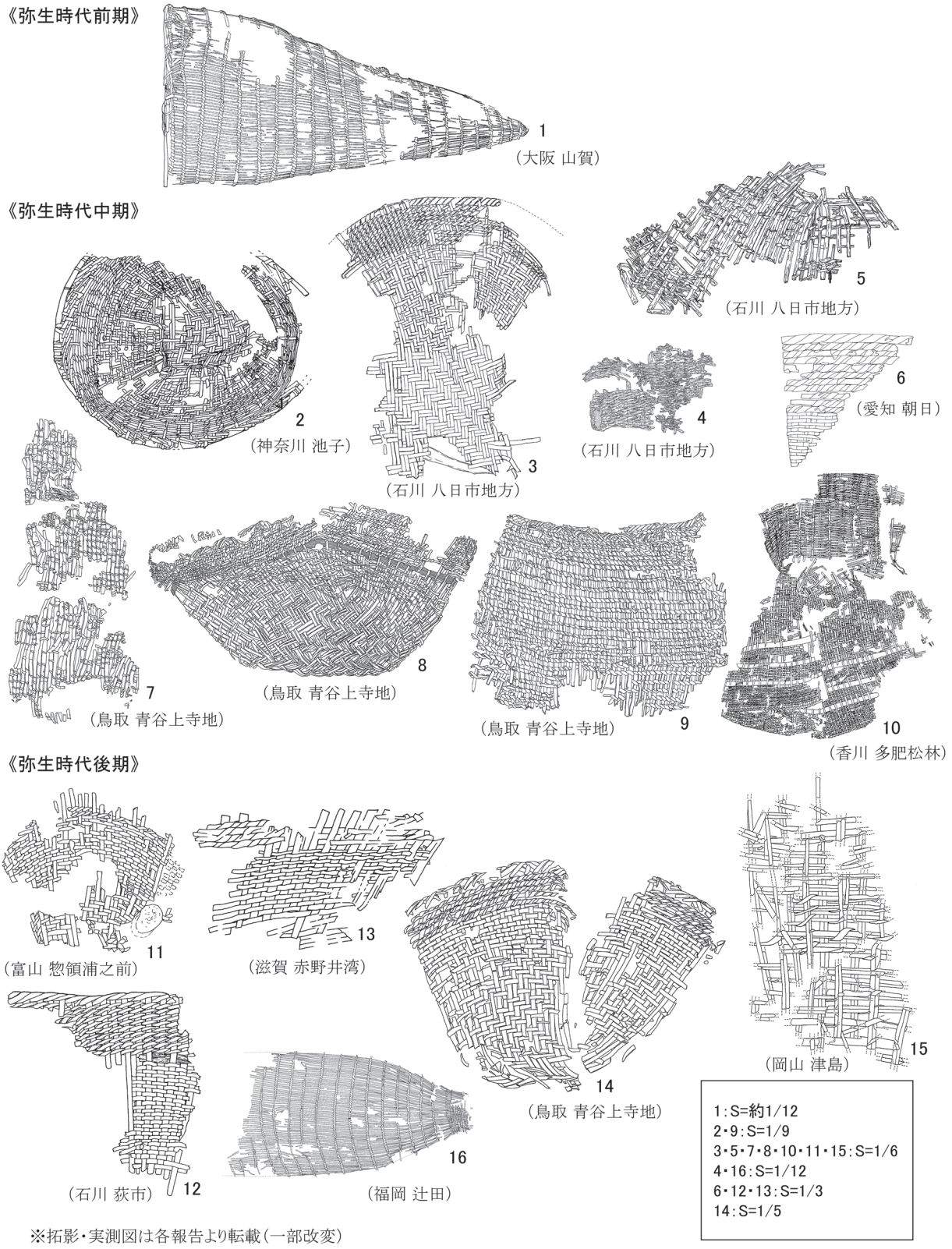



**図 4 東アジア先史時代の主なもじり編み資料 3**

器物に用いられていたことが見て取れる。その中で、特筆すべきことが二つある。一つは該期前半の日本海側地域でスダレ状圧痕（図 2-16）が卓越すること、もう一つは該期に鮎（図 2-11）のような大型品が登場し、もじり編みと巻きつけが用いられることである。

縄文時代後期においても、カゴ・編布など様々なもじり編みの編物が見つかっている（図 3-1［佐藤 2010］、図 3-2・3［佐々木 2006］、図 3-4・5［田辺ほか 1992］、図 3-6［鈴木ほか 2003］、図 3-7［渡辺・植松 1981］、図 3-8 ・9［牧本・小谷ほか 1996］、図 3-10［吉田 1999］）。ざっと見ただけでも、装飾的な模様編布、ヨコ添えもじり編みの部分的使用（カゴ類）、巻きつけによるカゴ製作など、実に多様な展開がうかがえる。

縄文時代晩期のもじり編み資料も、カゴ・筌・編布などの実物資料（図 3-11［宇部・小久保ほか 2002］、図 3-12［小柴ほか 1990］、図 3-13［山田 2000］、図 3-14［渡邊・坂上ほか 2009］、図 3-15［田海・渡邊ほか 2013］、図 3-16・17［荒川・石丸ほか 2004］、土器器面の圧痕資料（図 3-18［渡辺 1983］、図 3-19［鏡山 1972］）と多種多様である。該期の特徴には、漆漉し布としての編布の使用（図 3-11・14）や、九州地方における組織痕土器資料（型取り技法に伴う編物圧痕：図 3-19）の存在、北陸地方におけるスダレ状圧痕の再増が挙げられる。

弥生時代に入っても、広義のもじり編みは変わらず見られる。例えば同時代前期の大阪府山賀遺跡［西口ほか 1984］では、1 条絡め編みの筌が出土している（図 4-1）。

弥生時代中期には、定型カゴにおけるヨコ添えもじり編みの部分使用が最もよく見られる。しかし、それだけでなく、もじり編み・ヨコ添えもじり編み・1 条絡め編みの各種で面を形成する資料も存在し、カゴ類の製作技法としてもじり編みが変わらずあり続けたことが分かる（図 4-2［山本・谷口 1999］、図 4-3 ～ 5［橋本ほか 2003］、図 4-6［加藤ほか 1982］、図 4-7 ～ 9［野田・本間ほか 2005］、図 4-10［山下 1999］）。なお、弥生時代には編布資料はほとんど見られなくなるが、福島県龍門寺遺跡［渡辺 1985］で該期編布圧痕が確認されている。

弥生時代後期も、基本的に中期の様相を受け継ぎ、定型・非定型カゴや筌に広義のもじり編みの技法が認められる（図 4-11［島田ほか 2010］、図 4-12［川畑・沢辺ほか 1998］、図 4-13［濱ほか 1998］、図 4-14［野田・本間ほか 2005］、図 4-15［金田ほか 2003］、図 4-16［小池ほか 1979］）。

### 3）もじり編みの変遷とその背景

各時期・各地域の諸例を一通り把握したところで、東アジア先史時代におけるもじり編みの変遷とその背景について少し考えてみたい。

先に述べたように、東アジア最古のもじり編み資料は、縄文時代草創期の日本列島のものである。その技術水準から見て、その祖型は旧石器時代に遡ってもおかしくない。かなり遠隔地ではあるが、チェコ共和国のパヴロフⅠ遺跡に後期旧石器時代に属するもじり編みの圧痕資料（有圧痕粘土片）が存在することが知られている［Adovasio et al.1996］。それと直接つながるとは言わないが、日本列島のみならず中国大陸・朝鮮半島のもじり編みも、新石器時代よりも前の旧石器時代に起源を求めた方が自然であろう。

そして、さらに大元には、蔓植物の存在があったのではないだろうか。自然に囲まれた生活環境下では、蔓植物が巻きつく様子は当然目に入ったはずで、先史時代人（旧石器時代人）がそこから着想を得て、もじり編み系統の技法を生み出したものと考えたい。

その後、もじり編みは、日本列島を中心に多様化していく。土器製作用敷物（縄文時代全般、中国新石器時代前期・中期）、カゴ類の面形成および補強（縄文時代早期～）、編布の製作・使用（縄文時代前期～晩期、中国新石器時代前期）と衰退（中国新石器時代中期～、弥生時代～）、編布の装飾化（縄文時代後期）、漆漉し布としての編布の利用（縄文時代晩期）、巻きつけによる大型品・カゴなどの製作（縄文時代中期～）、特定の地域・時期におけるスダレ状圧痕の卓越（縄文時代中期前半・晩期）など、様々な形で技術的展開が見られるのである。

これらの背景について、いくつか推測すれば、①編布は、布製作技術（機織技術）の発展とともに衰退、②編布の漆漉し布としての利用は、縄文時代晩期における漆工文化（籃胎漆器などの製作）の卓越に伴って展開、③ヨコ添えもじり編み・1 条絡め編みを簡素化したような巻きつけは鮎のような大型品や隙間のあるカゴを製作するための粗化現象として出現・展開、な

どといったことが指摘できようか。

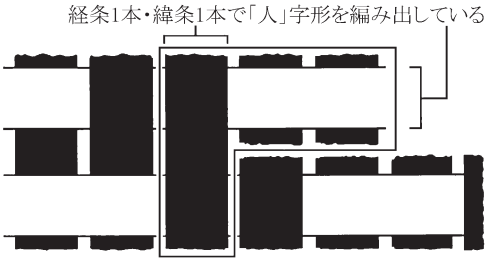
以上のように、もじり編みは、出現以来、東アジアの様々な要素と関わりながら、変遷していったのである。近年、個別遺跡・個別遺物の研究が多いが、やはり通時的な研究も必要である。

### 3. 多経多緯式の編物について

続いて取り上げたいのは、「多経多緯式」の編物である。日本考古学ではあまり馴染みがないが、中国考古学では比較的よく目にする表現である。しかし、この種の編物は、中国大陸のみに存在するわけではなく、同じ目線で出土資料を見ると、日本列島・朝鮮半島にも類例が存在することに気付く。

#### 1）多経多緯式の定義

多経多緯式とは、読んで字のごとく、「多くの経条と多くの緯条をそれぞれ 1 単位として組み合わせた編み方」で、網代編みの一種である。中国考古学では、日本考古学で用いられる「超え」・「潜り」・「送り」［ 坪井 1899］とは違い、「人字紋」や「十字紋」を構成する経条・緯条が何本 1 単位になっているかに着目して網代編みの組織構造を表現することが多い（図 5）。ここで扱う多経多緯式も、その中の一つなのである。




〈 1経1緯人字紋の場合 〉

**図 5 中国の網代編み分類・表現方法**
**［松永 2003 を改変］**

さて、具体的にどれくらいの数の条材を 1 単位とすれば多経多緯式に分類されるのだろうか。古くは浙江省銭山漾遺跡の発掘報告［ 浙江省文物管理委員会 1960］に「二経二緯（包括多経多緯）人字紋」とあるが、多経多緯が何本 1 単位なのかは明示されていない。少なくとも、二経二緯と多経多緯は別物である。そこで参考にしたいのが、山東省北辛遺跡の発掘報告［ 中国社会科学院考古研究所山東隊・山東省滕県博物館 1984］である。この報告中に「三経三緯和多経多緯的人字形編織法」という表現が見られるのである。これにならえば、4 本以上 1 単位で多経多緯とするのが妥当であろう。これは、筆者が当該編物を原体とする敷物圧痕について、「a・b・c × 4 ＋」［ 松永 2003］と分類したものと同義である。図 6 は経条・緯条ともに 4 本 1 単位の場合を模式図化したものであるが、これと同数またはより多い本数の条材が 1 単位になっているものをイメージしてもらえれば良いだろう [4)]。

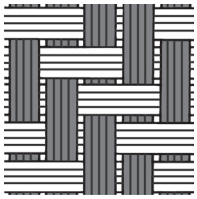


**図 6 多経多緯式の模式図例［松永 2013b］**

#### 2）多経多緯式の諸例（図 7）

多経多緯式の編物は、中国大陸では新石器時代中期からその存在が知られる。特に長江下流域の馬家浜文化・河姆渡文化に特徴的で、前者では江蘇省圩墩遺跡［ 常州市博物館 2001］・江蘇省草鞋山遺跡［ シンポジウム『稲作起源を探る』実行委員会 1996］、後者では浙江省田螺山遺跡［ 孫 2010］・浙江省河姆渡遺跡［ 浙江省文物考古研究所 2003］）で実物資料が出土している。河姆渡遺跡では、建物に伴う一種の敷物や壁材（室内のしきり？）の可能性が指摘されており（図 7-3・4）、その他の遺跡でも同様の用途が想定される。素材は、植物解剖学的な同定を経ていないが、アシ（圩墩遺跡・田螺山遺跡・河姆渡遺跡）やタケ（草鞋山遺跡）とされている。

なお珍しい例であるが、該期には黄河下流域においても多経多緯式の編物資料が見つかっている。長江下流域に見られるような実物資料ではないが、北辛文化の標式遺跡である山東省北辛遺跡［ 中国社会科学院考古研究所山東隊・山東省滕県博物館 1984］で、同種の編物の敷物圧痕を有する土器底部が認められるのである（図 7-2）。これは、当時多経多緯式の編物が土器製作用敷物として利用されることがあった事実を示す確実な証拠として注目される。

続く新石器時代後期においても、長江下流域では多経多緯式の編物が製作・使用されており、浙江省銭山漾遺跡［ 浙江省文物管理委員会 1960］で良渚文化に属

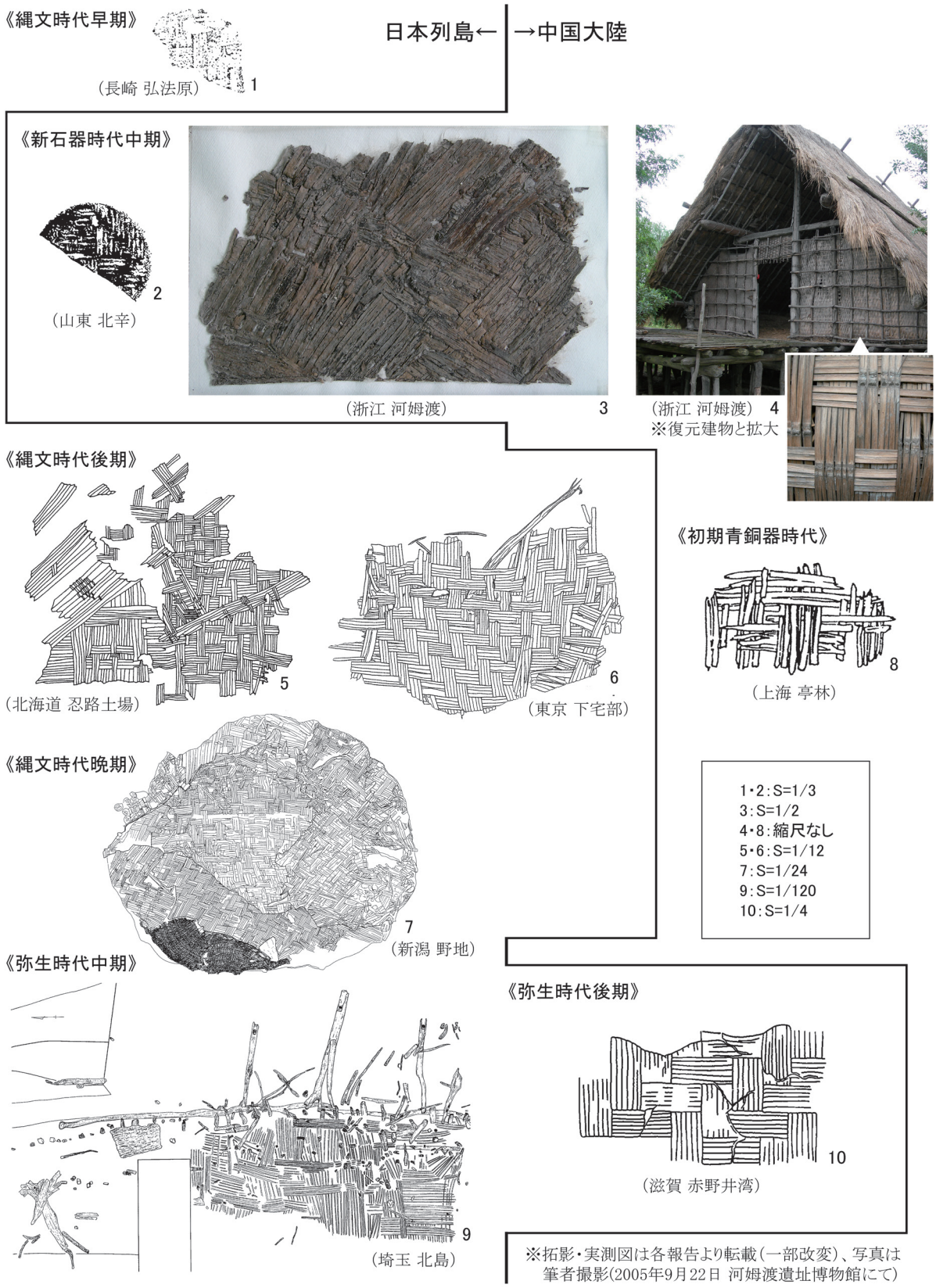



図 7 東アジア先史時代の主な多経多緯式資料

する実物資料が出土している。先述した通り、二経二緯と一緒くたにして報告されているため分かりにくいところがあるが、覆い・扉・敷物（穀物の晒しまたは座臥用）といった用途が想定され、素材は節を残したタケとされている。

さらに時代は下って、上海市亭林遺跡［孫 1997］では、初期青銅器時代の馬橋文化に属する多経多緯式の編物が出土しており、報告ではアシの敷物とされている（図 7-8）。長江下流域においては、新石器時代中期以来連綿とこの種の編物が製作・使用されていたことが分かる。

以上のように、中国大陸では長江下流域の諸文化を中心に多経多緯式の各種資料が見られるが、先史時代の日本列島を見ても同様の編物が存在する。

日本列島における多経多緯式編物の初現は実に古く、縄文時代早期（中国新石器時代前期併行期）にまで遡る。具体的には、北海道八千代 A 遺跡［北沢ほか 1990］や長崎県弘法原遺跡［高野ほか 1983］（図 7-1）で、多経多緯式と見られる編物の敷物圧痕を有する土器底部が見つかっている。このことは、日本列島においてかなり早い時期から土器製作用敷物としてこの種の編物が使用されていたことを示している。しかし、これは縄文時代早期の特殊な現象だったのか、日本列島において他時期の敷物圧痕は経条・緯条ともに 1 ～ 2 本 1 組の網代圧痕が基本となり、多経多緯式の敷物圧痕はまず見られない。

その後かなりの空白期間があるが、縄文時代後期以降、日本列島の各地で多経多緯式の実物資料が認められるようになる。

縄文時代後期の例としては、北海道忍路土場遺跡［中田ほか 1989］（図 7-5）・東京都下宅部遺跡［佐々木 2006］（図 7-6）がある。特に忍路土場遺跡では、大小多数の破片が出土しており、主に作業場の敷物としての利用が想定されている。両遺跡出土資料とも素材は未同定だが、直線的な割り裂き材のようである。

縄文時代晩期には、群馬県茅野遺跡［榛東村教育委員会 1993、文化庁記念物課・奈良文化財研究所 2010］と新潟県野地遺跡［田海・渡邊ほか 2013］の例が知られる。茅野遺跡のものは、竪穴建物の底面で見つかっており、住居床面に敷かれていた敷物と考えられる。一方、野地遺跡では、土坑に伴ってこの種の編物が見つかっており、土坑の敷物および蓋としての用途が推測される（図 7-7）。なお野地遺跡例は、樹種同定の結果、イネ科タケ亜科のササ類であることが判明している［小林和ほか 2013］。

弥生時代に入っても、多経多緯式の編物は各地で見られる。むしろ縄文時代以上に資料が多い。

弥生時代前期には、大阪府高宮八丁遺跡［塩山ほか 1989］・奈良県唐古・鍵遺跡［小林行ほか 1976］のものがある。高宮八丁遺跡のものは、中期に下る可能性もあるが、弥生時代編物としては比較的珍しい貯蔵穴に伴う敷物で、ある意味縄文的と言えるかもしれない。弥生時代の編物は、河道・流路から出土することが多く、多経多緯式の資料もほとんどがそうである。唐古・鍵遺跡では、弥生時代中期にも同様の資料が見られ、前期の資料とともにいずれもアシの敷物とされている。

唐古・鍵遺跡以外の弥生時代中期例としては、埼玉県北島遺跡［吉田 2003］（図 7-9）・千葉県常代遺跡群［甲斐ほか 1996］・神奈川県池子遺跡群［山本・谷口 1999］・静岡県有東遺跡［平野ほか 1983］が知られる。特に、北島遺跡と常代遺跡群の資料は堰として利用されており、非常に大型の編物として注目される。

その後、弥生時代後期においても、千葉県国府関連遺跡群［小久貫ほか 1993］・静岡県登呂遺跡［後藤ほか 1954］・滋賀県赤野井湾遺跡［濱ほか 1998］（図 7-10）で多経多緯式の編物が見つかっている。

このように、日本列島においても縄文時代・弥生時代の長きに渡って多経多緯式の編物が製作・使用されていたことが分かる。特に、遺跡数・種類など縄文時代よりも弥生時代の方が多く見られることは、大陸文化の影響も考える必要があろう。しかし、縄文時代以来日本列島にも多経多緯式の編物は存在することを勘案すれば、伝統的発展と見ることもできる。今後、編物以外の情報を集めて検討する必要がある。

朝鮮半島では、先史時代に属する資料は見られないが、歴史時代には多経多緯式の編物が存在する。平壌市楽浪土城址から出土した滑石混和胎土土器の底部に多経多緯式の敷物圧痕（網代圧痕）が残される例があり［谷 1986］、先史時代に遡る可能性を示唆している。

以上のように、多経多緯式の編物は、東アジアの広範囲で製作・使用されていたことが分かる。決して、中国大陸（特に長江下流域）の特殊な編物ではないのである。

### 3）多経多緯式編物の製作・使用とその背景

さて、この多経多緯式の編物は、数多ある先史編物の中で、どのような存在として製作・使用されていたのだろうか。この種の編物の特徴をよく見てみよう。

多経多緯式の編物には､敷物･壁材･蓋･堰などといった各種（器種）が想定されているが、いずれも平面的な編物であるという点が共通している。そして、平面的な編物の中でも､比較的大きなものが多い。素材は、未同定のものも多いが、直線状で節のある素材を使用していることが多く、主にイネ科植物の稈を割り裂いて使用しているものと見られる（絶対的なものではない)。

すなわち、大きな平面物を製作しようとした時に、直線状の植物素材を一度にまとめて組み合わせるために、多経多緯式が選択されていることが推測される。大面積の編物を作ることを目的とするならば、条材を１本ずつ超え潜りしていても時間がかかるだけであり、可能な限り多くの条材（4 本～ 12 本、製作者の手の大きさなどの制限を受けるか）をまとめて組み編んだ方が効率的である。逆に、土器底径程度の小面積があれば十分に機能を果たす土器製作用敷物としての利用例がきわめて少ないこと（敷物圧痕の数が少ないこと）も、多経多緯式が大きな平面物に向いていることを物語っている。経条・緯条 4 本以上 1 組の網代編みが大きな平面物に適しているということについては、過去にも簡単に指摘していたが［松永 2013a・2013b]、本論で示した多くの資料を証拠として、改めてこの点を強調しておきたい。

## 4. おわりに

以上、雑駁な内容になってしまったが、東アジア先史時代の編物に関して、筆者の現在の考えを記しておきたいと思い、本稿を起こした次第である。

もじり編みについては実物・圧痕ともに当該資料が多い北陸地方出身者として、多経多緯式については中国新石器時代の編物も研究対象にしてきた者として、自分なりの見解を示したつもりである。また前者は筆者の一貫した姿勢に基づいたもの、後者はそれとはあえて別の視点で資料を捉えたものとなっている。

編物資料には、様々な見方がある。それぞれの視点に意義があり、どれが欠けても抽出される情報に偏りが生まれる。しかし、その中でも、考古学的研究の軸とすべきものはあるはずで、筆者は学史的背景を重視しながら、模索を続けている。

今号は、佐々木達夫先生の古稀記念号ということで、何か土器・陶磁器に関する論文を寄稿させていただくべきかと思いましたが、不勉強な筆者には、自分の専門分野で論文を書くことが精一杯でした。縁あって今年は、先生主催の近世陶磁器見学会（陶磁器を見る会）に 2 度も参加させて頂きましたが、それを生かすことができずお恥ずかしい限りです。せめて、現状でできる限りのものを出させていただこうと、これまで温めていた研究 2 本を一つにまとめて寄稿することにしました。先生の古稀のお祝いにはそれでも不十分かと思いますが、改めてお祝い申し上げます。

### 註

1) 不覚にも最近になって再認識したが、アメリカ人考古学研究者の J.M. アドヴァシオ氏は‘three major variations of basketry’として‘twining, coiling and plaiting’を挙げている［Adovasio et al.1996]。

2) 筆者は、縄文原体の縄の撚り方向表現に合わせて絡め材の左右を表現することにしているが、全く逆の見方もある。あくまで筆者が、日本考古学および縄文時代研究の学史を尊重する立場から、縄文原体の L の撚りと同様の絡め方を左絡み（左巻き)、縄文原体の R の撚り方と同様の絡め方を右絡み（右巻き）としているに過ぎない［松永 2013b・2014]。正直なところ、縄の撚り方向も編物の絡め方向も、現代繊維工芸で用いられている S・Z 方式（本論の左＝ S、本論の右＝ Z）を援用した方が視覚的で分かりやすい。今後､これらの表現方法について、十分な議論をおこなうことが必要であろう。

3) 当該技法は､吉本忍氏の分類［吉本 1987]においても｢捩り組織｣に含まれている。

4) 部分的に 1 単位 4 本未満の箇所があっても、基本が 4 本以上なのであれば、多経多緯式に含める。

### 参考文献

新井和之 1987「編物」『北江古田遺跡発掘調査報告書 (1)』34-37 頁 .

荒川隆史・石丸和正ほか 2004『青田遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 .

安楽勉・藤田和裕 1985『名切遺跡』長崎県教育委員会 .

石橋孝夫ほか 2005『石狩紅葉山 49 号遺跡発掘調査報告書』石狩市教育委員会 .

宇部則保･小久保拓也 2002『是川中居遺跡（長田沢地区)』八戸遺跡調査会 .

小久貫隆史ほか 1993『千葉県茂原市国府関連遺跡群』茂原市教育委員会・(財) 長生郡市文化財センター.
尾関清子 2007「縄文時代草創期・早期の土器底部圧痕について」『考古学ジャーナル』№.565,28-33 頁.
尾関清子 2012『縄文の布』雄山閣.
岡田康博ほか 1998『三内丸山遺跡Ⅸ』青森県教育委員会.
甲斐博幸ほか 1996『千葉県君津市常代遺跡群』(財) 君津郡市文化財センター.
鏡山猛 1972「原生期の織布」『九州考古学論攷』413-485 頁.
加藤安信ほか 1982『朝日遺跡』愛知県教育委員会.
金田善敬ほか 2003『津島遺跡 4』岡山県教育委員会.
河南省文物考古研究所 1999『舞陽賈湖』.
川畑誠・沢辺利明ほか 1998『石川県羽咋郡志雄町荻市遺跡』(社) 石川県埋蔵文化財保存協会.
邯鄲市文物保管所・邯鄲地区磁山考古隊短訓班 1977「河北磁山新石器遺址試掘」『考古』1977 年第 6 期 361-372 頁.
北沢実ほか 1990『帯広・八千代 A 遺跡』帯広市教育委員会.
倉永英季 2001『木脇遺跡 (旧石器時代～弥生時代編)』宮崎県埋蔵文化財センター.
小池史哲ほか 1979『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第 12 集』福岡県教育委員会.
小柴吉男ほか 1990『荒屋敷遺跡Ⅱ』三島町教育委員会.
後藤守一ほか 1954『登呂』毎日新聞社.
小林和貴ほか 2013「野地遺跡出土編組製品の素材植物と木製品の樹種」『野地遺跡Ⅱ』30-33 頁.
小林行雄ほか 1976『大和唐古弥生式遺跡の研究』.
佐々木由香 2006「編組製品」『下宅部遺跡Ⅰ (1)』東村山市遺跡調査会 147-179 頁.
佐々木由香ほか 2014「下宅部遺跡の編組製品および素材束からみた縄文時代の植物利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 187 集 323-345 頁.
佐藤剛 2010「「綟り編組織を基本とした模様編布」について」『柏木川 4 遺跡 (4)』201-222 頁.
塩山則之ほか 1989『高宮八丁遺跡 木器編』寝屋川市教育委員会.
島田美佐子ほか 2010『惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡発掘調査報告』(財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所.
常州市博物館 2001「1985 年江蘇常州圩墩遺址的発掘」『考古学報』2001 年第 1 期 73-110 頁.
榛東村教育委員会 1993『茅野遺跡出土品』.
シンポジウム『稲作起源を探る』実行委員会 1996『シンポジウム 稲作起源を探る』.
鈴木篤英ほか 2003『四方谷岩伏遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター.
浙江省文物管理委員会 1960「呉興銭山漾遺址第一、二次発掘報告」『考古学報』1960 年第 2 期 73-91 頁.
浙江省文物考古研究所 2003『河姆渡』.
センテンス,B. 2002『世界のかご文化図鑑』.
孫維昌 1997「上海市金山県査山和亭林遺址試掘」『南方文物』1997 年第 3 期 3-23 頁.
孫国平 2010「田螺山遺跡第一段階調査 (2004-2008 年) の概要」『浙江省余姚田螺山遺跡の学際的総合研究』21-40 頁.
高野晋司ほか 1983『弘法原遺跡』吾妻町教育委員会.
田辺常博ほか 1992『市港遺跡・北寺遺跡』三方町教育委員会.
谷豊信 1986「楽浪土城址出土の土器 (下)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 5 号 73-124 頁.
中国科学院考古研究所・陝西省西安半坡博物館 1963『西安半坡』.
中国社会科学院考古研究所山東隊・山東省滕県博物館 1984「山東滕県北辛遺址発掘報告」『考古学報』1984 年第 2 期 159-191 頁.
坪井正五郎 1899「日本石器時代の網代形編み物」『東京人類学会雑誌』第 161 号 440-444 頁.
田海義正・渡邊裕之ほか 2013『野地遺跡Ⅱ』.
中田節子ほか 1989『小樽市忍路土場遺跡・忍路 5 遺跡』(財) 北海道埋蔵文化財センター.
中井真夕 2007『桜町遺跡発掘調査報告書 木製品・繊維製品・植物編』小矢部市教育委員会.
中村由克 2001『市道遺跡発掘調査報告書』信濃町教育委員会.
新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1974『吉野屋遺跡』.
西口陽一ほか 1984『山賀 (その 3)』(財) 大阪文化財センター
西田巌・佐々木由香ほか 2009『東名遺跡群Ⅱ』第 5 分冊 佐賀市教育委員会.
任鶴鐘ほか 2008『飛鳳里』国立金海博物館.
布目順郎 1990「押出遺跡出土の一種の編物について」『押出遺跡発掘調査報告書 (図版・表・分析編)』86-88 頁.
野田真弓・本間一恵ほか 2005『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』1 鳥取県埋蔵文化財センター.
橋本正博ほか 2003『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会.
濱修ほか 1998『赤野井湾遺跡』滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会.
平野吾郎ほか 1983『有東遺跡Ⅰ』静岡県教育委員会.

藤﨑光洋・中村和美　2006『三角山遺跡群（3)』第 1 分冊　鹿児島県立埋蔵文化財センター .

文化庁記念物課・奈良文化財研究所 2010「竪穴建物」『発掘調査のてびき―集落遺跡発掘編―』131-157.

牧本哲雄・小谷修一・高垣陽子ほか　1996『桂見遺跡―八ツ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区―』（財）鳥取県教育文化財団 .

松永篤知　2003「中国新石器時代の「敷物圧痕」について」『中国考古学』第 3 号　22-45 頁 .

松永篤知　2004「東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類について」『金沢大学考古学紀要』第 27 号　99-108 頁 .

松永篤知　2013a「東アジア先史時代の植物質編物の研究」『名古屋大学学術機関リポジトリ』(http://hdl.handle.net/2237/17973) .

松永篤知　2013b「野地遺跡 SK1 から出土した編物について」『野地遺跡Ⅱ』34-38 頁 .

松永篤知　2014「編物･縄類と縄文土器底部の「敷物圧痕」」『小竹貝塚発掘調査報告』第 2 分冊　11-18 頁 .

松永篤知　2015「東アジア先史時代の編物」『金沢大学考古学紀要』第 36 号　15-35 頁 .

皆川洋一・西脇対名夫ほか　1995『千歳市キウス 5 遺跡・キウス 7 遺跡（2)・ケネフチ 8 遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター .

山下平重　1999『多肥松林遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター .

山田昌久　2000「漆器と木製品」『戸平川遺跡』167-178 頁 .

山本暉久・谷口肇　1999『池子遺跡群Ｘ』（財）かながわ考古学財団 .

山本直人　1986「底部圧痕・編物・縄」『石川県能都町真脇遺跡』248-260 頁 .

吉田寛　1999『龍頭遺跡』大分県教育委員会 .

吉田稔　2003『北島遺跡 VI』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団 .

吉本忍　1987「あみもの　編物」『文化人類学事典』22-23 頁 .

渡邊裕之・坂上有紀ほか　2009『野地遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 .

渡辺誠・植松なおみ　1981「布勢遺跡出土のカゴについて」『布勢遺跡発掘調査報告書』39-41 頁 .

渡辺誠　1983「編布およびカゴ底圧痕について」『野々市町御経塚遺跡』339-346 頁 .

渡辺誠　1985「編布の研究」『日本史の黎明』169-207 頁 .

渡辺誠　1995「中国新石器時代における編布圧痕の研究」『名古屋大学文学部研究論集』122　史学 41, 1-11 頁 .

Adovasio, J. M., Soffer, O. & Klíma, B. 1996 Upper Palaeolithic fibre technology : interlaced woven finds from Pavlov I, Czech Republic, c.26,000 years ago, *Antiquity* 70 : 526-534.